



城

第五十七回

うすいじょう
白井城

～謙信の関東制覇の挫折～

山本 忠博

上杉謙信には常勝のイメージがあります。しかしながら、実のところ謙信の生涯戦績の勝率はそれほど高くありません。引き分けが多いので、勝ち戦は6割くらいでしょうか。謙信が負けなことを第一に考えていたからだとも言えますが、他に勝ち戦が8割を優に超える武将(毛利元就等)がいることを考えると、謙信も意外と戦の天才ではないように思えてきます。当然ながら負け戦もあります。今回は、謙信の負け戦の中でも、かなり手痛い敗北の地になった、千葉県佐倉市の白井城をご紹介します。

白井城の戦いの意味

最初に、この城をめぐる戦いがどうして謙信にとって手痛いものであったのかについて、考えておきましょう。

越後国(現新潟県)という関東の中心から離れた地の武将だった謙信が、どうして関東管領(室町幕府下の関東経営の副長官)になったかといえば、先代の関東管領だった上杉憲政が、新興の北条氏に関東を追われて謙信を頼ったためです。

謙信にとって関東管領の肩書きは、配下を繋ぎ止める上での権威付けになったとはいえ、同時に、越後とは無関係な関東の争乱、つまりは対北条戦に巻き込まれる原因になってしまいました。謙信とすれば、関東の諸将は対北条戦で関東管領の下に糾合すべきと考えていたことでしょう。しかし、戦国後期の諸将にそんな旧来の価値観の効果はさほどなく、謙信は、北条氏の侵攻をはね除けることによる領地の保持という実益でしか関東の諸将を繋ぎ止められませんでした。

そうすると、謙信は対北条戦で勝ちを積み重ねなければなりません。しかし、結果として謙信はそれができませんでした。白井城の攻略戦に失敗して、関東諸将の気持ちも謙信から離れてしまったからです。そうすると、白井城の戦いは、その後の関東の

覇者を決める分岐点になった戦いであり、謙信にとっては、関東の制覇に挫折した戦いになります。

白井城の歴史：上杉謙信の登場前

白井城の初めは千葉氏の支族が築いた居館とされます。千葉氏は、板東八平氏(平安期に関東に下向した桓武平氏の一流の八庶家)と関東八屋形(室町幕府の鎌倉公方を補佐する有力八家)のいずれにも数えられる、下総国(現千葉県北部等)の有力な武家です。(ちなみに、第五十一回のお田城の小田氏も関東八屋形の一つです。)

ただし、この居館と白井城の関係は必ずしも明らかとは言えず、白井城が、はっきりと歴史上で城として登場するのは、長尾景春の乱(1476—1480年)の頃になります。長尾景春の乱については、第三十一回(石神井城)で触れました。この乱の際に、太田道灌は、長尾方に付いた千葉氏を白井城に攻め、これを激戦の末に攻略しています(1479年)。その際に道灌の弟(甥とも)が戦死しており、この弟の墓が今も白井城に在ります。

上杉謙信と北条氏との戦い：白井城への余波

第五十一回のお田城と第五十五回の武州松山城で触れたように、上杉謙信が北条氏に関東を追われた上杉憲政の求めに応じ、その名代として1561年に北条氏の本拠の小田原城に攻めました。その際に、白井城においても戦いが生じています。当時の白井城には、千葉家の家老にして実質的に千葉家を牛耳っていた原氏が居り、北条方に与していました。そのため、謙信に呼応した安房国(現千葉県南部)の里見氏の配下の攻撃を受けました。白井城は、このときに一旦、里見方に落ちています。

しかし、謙信は、結局小田原城を落とすことはできず、甲斐国(現山梨県)の武田氏の信濃北部(現長野市)への侵攻に対処するために(第二十一回

津城を参照：世に言う川中島の戦い)、兵を引きました。

その後、白井城は、原氏が奪還しています(1564年)。

白井城の戦いの前哨戦

謙信が関東への出兵を繰り返して北条氏とのいたちごっこ様な戦況を展開している最中の1565年の初めに、北条氏は謙信方の里見氏に付いた城を攻撃しました。そのため里見方が謙信に救援要請を出しています。しかし、謙信はすぐには動けず、自身が兵を率いて関東に出兵をしたのはその年の暮れで、実際に戦闘を開始して下総国の方面に動き始めたのは1566年になってからでした。その進撃の過程で、第五十一回の小田城の4回目の落城があります。

謙信は、小田城を落とした勢いのままに下総国も一気に平らげるつもりで進軍を続けました。しかし、事はそう上手くは運ばず、白井城の手前の北条方の城を落とせないまま、さらに進んで白井城を囲む事になりました。白井城は印旛沼を天然の堀としており、謙信としては、この印旛沼と利根川の水運を手に入れたかったと推測されます。

白井城の戦い

1566年3月上旬に上杉軍は里見軍とともに白井城を囲みました。攻城側の兵が1万5千だったのに対して、城方は2千ほどだったと言われます。城方は、北条氏に援軍を要請しますが、北条氏も里見氏と事を構えている最中で多くの兵を割くわけにいかず、松田康郷以下の150騎しか城に送れませんでした。

3月の下旬にさしかかる頃には、壕を一筋残すみの状態まで城方は追い込まれ、落城は目の前でした。そんな中で、白井入道浄三しらいにゅうどうじょうさんという軍師が、城主から指揮権を与えられ、城方を大逆転勝利へと導くこととなります。この浄三という人物は謎が多く、この戦いにしか登場しないので、実在の人物なのかもはっきりしませんが、以下では今に伝えられているとおりに戦いの経緯を書くことにします。

指揮を任された浄三は、城兵を鼓舞し、機会が来るのを待ちました。そして、上杉方が総攻撃に出てきたところで、城の門を全開にし、謙信の本陣のみを目指して第一陣から第三陣までを同じ道筋で次々と突入させました。このときの城方の突撃は凄まじ

く、特に第三陣の松田康郷の活躍が目覚ましくて、城方は謙信の本営にまで迫りました。このため、謙信は一時的に退却を余儀なくされました。康郷は、この突撃の際に赤い甲冑を着けていたので、以後赤鬼と呼ばれることとなります。

翌日になって、謙信は、城方が勢いづいてまた打って出てくるだろうと予想して待ち構えました。しかし、城方はいっこうに出てきません。焦れた謙信は、逆に攻撃を命じます。城壁に迫る攻城兵。すると、そこに城壁が一気に崩れてきました。一瞬にして城壁に押し潰される兵士達。これも、浄三の計略でした。この惨状に謙信は兵を引かせますが、これに城方の追い打ちがかかって、上杉方は完全なる敗北を喫します。このときの上杉方の損害については、北条側の資料では死傷者数千とされ、上杉側の資料では死者3百とされています。数字に差はありますが、どちらを採用してもたいへんな損害であることに間違いはなく、謙信にとっては痛恨の大敗北となりました。そして、上杉軍は4月には、関東から撤退することとなります。

その後の白井城

関東が北条氏の支配にほぼ入ろうとした頃に、皆さんご存じのとおり、豊臣秀吉とよひでよしによる小田原征伐が行われます(1590年)。この戦いで北条氏は没落。同様に北条氏に付いていた原氏、千葉氏も没落し、白井城は徳川氏とくがわの配下の城となります。しかし、その後間もなく、江戸時代の初期に白井城は役目を終え、廃城となりました。

現在は、佐倉市により、白井城址公園として整備され、桜の名所となっています。そして、印旛沼が一望できる景勝の地となっています。



白井城址公園(提供:佐倉市)